

## 世界史A[分析]

## グラフを使った問題が多く、新しい形式の問題も出題された。

表・グラフが全体で6枚使われた。また、会話文のなかで先生が誤りを指摘した空欄を埋める新しい形式の問題が出題されている。

## 難易度（【第1日程(1月16日・17日)】との比較）

## 第1日程並み

表やグラフを読み取る問題が多いものの、内容は平易で、正誤判定に迷うことはない問題が多い。

## 出題分量（【第1日程(1月16日・17日)】との比較）

第1日程が全5問であったのに対して、第2日程は全4問であった。ただし、小問数は33問で変わらず。

## 出題傾向分析（【第1日程(1月16日・17日)】との比較）

グラフや資料・図版などが多用されたのに対して、地図問題の出題がなかった。第1日程よりも共通テストの試行調査世界史Bの形式に寄った問題であった。

## 2021年度【第2日程(1月30日・31日)】フレーム

大問	分野	配点	マーク数
第1問	国際関係	40	13
第2問	資料を用いた授業	15	5
第3問	世界史上の君主	18	6
第4問	世界遺産	27	9
合計		100	33

## 2021年度【第1日程(1月16日・17日)】フレーム

大問	分野	配点	マーク数
第1問	国際関係や国際貿易の歴史	19	6
第2問	世界史上の人物・事件を題材にした映画や絵画	18	6
第3問	世界史上の君主	27	9
第4問	世界史上の出来事の記録	18	6
第5問	民族間の対立関係や民族独立の運動	18	6
合計		100	33

## 設問別分析

## 第1問

国際関係について、Aではカナダのケベックにおける、フレンチ=インディアン戦争・南アフリカ戦争・第二次世界大戦についての議論を、Bでは19世紀中葉のロシアの思想家の議論を、Cではティラクが日本に送った寄付の受領証を、Dではライシャワーの「対日本政策についての覚書」を扱って出題している。問3の二文正誤問題は、一文が長く正誤を判定する要素が多く含まれている。問4は、消去法で判断する問題である。問13は、長い資料を読んで内容を把握して解答する必要のある問題である。

## 第2問

資料を用いた授業について、Aでは1870年と1914年のイギリスの資本輸出と1914年の資本輸出の国別シェアについての班別学習を、Bでは1900年以降の上海の外国人住民数を取り上げた授業を扱って出題している。Bの表は、2003年センター試験世界史B追試験で使われた同じ資料である。問1・問2は、会話文のなかで先生が誤りを指摘した空欄を埋める、これまでにない新しい形式の問題である。

## 第3問

世界史上の君主について、Aではイギリス議会における黒杖官を、Bでは中国における君主の呼び名についての会話を扱って出題している。問5は、正解の選択肢が平易なので、他の選択肢に細かい情報が含まれているものの、正解はできる。

## 第4問

世界遺産について、Aではノートルダム大聖堂の歴史を、Bでは万里の長城についての会話を、Cでは都市ローマとムッソリーニを扱って出題している。「2019年に火災に遭ったパリのノートルダム大聖堂」について問うているのは、現実との関わりを意識した出題であると考えられる。問7は、コロッセウム用語ではなく写真で選ぶ問題である。問8はセンター試験で出ていたような年表問題で、内容は平易であった。

## 過去平均点の推移

21年度※ 【第1日程】 (1月16日・17日)	20年度	19年度	18年度	17年度
46.1	51.2	47.6	39.6	42.8

※2021年度の平均点は1/22 大学入試センター発表の中間集計その2の平均点です。